



Title	『オブローモフ』における事物イメージについて：コーヒーとウオトカ
Author(s)	大西, 郁夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 48(3), 55-72
Issue Date	2000-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/33757">http://hdl.handle.net/2115/33757</a>
Type	bulletin (article)
File Information	48(3)_PL55-72.pdf



[Instructions for use](#)

# 『オブローモフ』における事物イメージについて — コーヒーとウォトカ —

大 西 郁 夫

## 1. リアリズムにおける細部

小説における印象的な細部というものがある。思いつくままに挙げれば、ドストエフスキ『罪と罰』における「ドラデダム織りの緑色のショール」などはそれにあたるのではないだろうか。マルメラードフの家族が全員で共有するこのショールは、ソーニャが初めて身を売った日の夜や、狂乱に陥ったカテリーナが子供たちを引き連れて街に飛び出したとき、あるいはラスコーニコフが大地への接吻と警察への出頭の直前、十字架を請いにソーニャを訪れたときに言及されている。それは寓意や象徴というほど、明確に何か別の事柄を代替しているわけではないが、同時にマルメラードフ一家のイメージと分かち難く結びつく印象的な細部である。そのことは小説の発表当時から感じられていた。後にドストエフスキ夫人となるアンナが、初めてドストエフスキの家を訪れたとき、彼の女中の羽織っていたショールから「マルメラードフ家にあれほど重要な役割を果たしたドラデダム織りのショール」を連想したという回想を残している。<sup>1</sup> 17万語近いことばから成る小説の中でわずか6回（4場面）出現するだけのこの語が、なぜかこのような強い印象を持っている。

あるいはほぼ同時代のツルゲーネフ『父と子』における「チェロ」もそういうものといえるかもしれない。バザーロフを連れて帰ってくるアルカージイの父であるニコライ・キルサーノフは、思うにまかせぬ領地経営に悩みな

がらも誠実にそれに取り組む44歳の地主貴族であるが、その彼が好むのがチェロの演奏である。ニヒリストを自認するバザーロフは「44歳の人間が、一家の長ともあろうものがこんな田舎でチェロを弾くなんてね」<sup>2</sup>と嘲笑する。ここではチェロという楽器が、妻を亡くした後若い娘と子供を設けてしまうが、それを大学から戻ってきた息子に言い出しかねているような、純情なところの残る、そして田舎にいてなお文化の香りを懐かしむロマンチストのニコライ・キルサーノフの人柄を表現するだけではなく、それを揶揄するバザーロフの位置をも示すものとなっている。5万8千語近い小説のことばの中でわずか4回（2場面）言及されるだけではあるが、この語もまた小説の中の印象的な細部なのである。

ドラデダム織りのショールにしてもチェロにしても、それが何かの寓意であるとか象徴だというよりは、あくまで小説の中の事実即した描写である。それでいながらこうした効果をもっているのは、それが一種の文学的方法だからだと考えることができる。ヤコブソンは19世紀リアリズムに多く見られるこの方法の特徴を換喩と提喩だと規定し、さらにチジェフスキイはこれをロマン主義特有の暗喩と対比している。それらをふまえて西中村浩氏は19世紀リアリズムの特徴を次のように説明している。

リアリズムの時代の文学の特徴について考えることは、たとえば、その前の時代のロマン主義やリアリズムの後の時代の象徴主義について考えることと比べれば、はるかに難しい。ロマン主義は古典主義に対抗する明確な理念をもった運動であり、ロシアにおいてもそれはバイロンやドイツロマン主義などの影響を受けて展開したし、一方、リアリズムを批判して登場した象徴主義は創作と理論を並行して展開していった。〈中略〉

しかし、それでも十九世紀のリアリズム作家たちに共通するものを見つけることはできる。その手掛かりとなるのは、ヤコブソンとチジェフスキイがリアリズムの特徴として指摘している換喩（メトニミー）的な表現である。〈中略〉

そしてまた、ヤコブソンによれば、リアリズムに多く用いられる換喩や提喩は、プロットやテーマに関わらないような非本質的な人物や事物であるが(『芸術的リアリズムについて』)、こうした本質と関わらない細部的な特徴は古典主義時代にはけっして言及されることはなかったものである。

このような非本質的な細部の換喩的な描写は、作家が現実の細かいところまで忠実に再現しているのだという幻影を与えることによって、リアリズムの求める作品の「ほんとうらしさ *vraisemblance*」を作り出すものでもあった。だがもっと重要なことは、これがリアリズム的な世界観と関わり、また作品に描かれる細部や登場人物が換喩的に世界全体を表しうるのだという考えともつながっているということであろう。<sup>3</sup>

こうした換喩あるいは換喩の一種で、部分で全体を示す提喩としての細部は、先に挙げた『罪と罰』『父と子』とほぼ同時代のゴンチャロフ『オブローモフ』においても数多く見られる。むしろ『オブローモフ』においてはそれらの細部が反復・強勢されることによって、ドストエフスキヤツルゲーネフにおける細部よりも喩法としての特徴が明示的になっているとも言える。なぜならそれが換喩であれ提喩であれ、一回きりの叙述としてではなく喩法だと意識されるには反復されることが有効だからである。

こうした細部へ注目する場合、近年発達してきたコンピュータを利用した研究方法が大きな威力を発揮する。従来は特定の語を対象にしようとするれば、読み手の記憶やカード式のメモに頼るといった多大の集中力と労力を要する作業を強いられたが、コンピュータを利用すれば必要な語を瞬時に抜き出すことも可能だし、作業過程でキーワードを補足する必要が生じた場合もすぐに対応できる。ここで取り上げる3つの作品も、コンピュータによる語彙統計の利用が可能だったから考察の対象にすることができたものであり、実は冒頭に述べたような「思いつき」ではない。『罪と罰』の場合にはコンピュータを利用したコンコーダンスが刊行されており、<sup>4</sup>『父と子』および『オブロー

モフ』ではインターネットから取得した電子テキストを用いて筆者が分析作業用のデータを作成した。その方法と詳細については別稿に記したので再述しないが、そこで得られたデータを基に『オブローモフ』における二人のヒロイン、オリガとアガーフィヤがそれぞれ眉と肘という提喩と結びついていることを、これらの語の使用回数と作品中の分布、人物への帰属の集中度の高さをふまえて論じた。<sup>5</sup>

## 2. 『オブローモフ』における細部の意味

ひとつの特徴を人物に結びつけて繰り返し描くことで、その特徴の提喩性を際立たせるのは、ゴンチャロフのとりわけ『オブローモフ』における全体を貫く表現手法である。それがオリガとアガーフィヤという女性の人物像に関しては、眉、肘といった身体的特徴によっているが、これに対して主人公オブローモフではガウンや靴下といった衣類が用いられている。それはおそらく眉や肘といった身体的特徴がその人物の個別の描写に傾きがちなのに対して、事物はそれを媒介にして関係性を表現するのに適しているからだと考えられる。例えば靴下及びそれを含めて長靴など履き物一般について、次に述べるガウンと対になるスリッパを除けば、オブローモフは自分で履くことはなく従僕のザハールが履かせている。ただしザハールは粗忽者だしオブローモフも無頓着なので時に左右がちぐはぐだったりして、その点をシュトリツに揶揄され、それがオリガに伝わりからかいの種とされる、といったかたちで繰り返し言及される。こうして靴下は、オブローモフが自分の力で生きていないことの比喩として用いられると同時に、彼とザハール、シュトリツ、オリガの関係が描かれる契機になるのである。

ガウンについても同じようなことが言える。冒頭からこのガウンは主人公の分身のように詳細に叙述されている。それは「ペルシアの生地のできた、真に東洋風なガウンで、ヨーロッパ的なところはいささかもなく、房もピロードもウェストもないはなはだゆったりとした」アジア的な衣類である。<sup>6</sup> また少し古くなってはいるがその本来の色合いや艶はまだ保っていて、彼の身体

の動きにぴったり添う。このガウンはまさに30歳をいくつか越えてすでに若々しさは失っているが、その本来の善良さという美点は失っておらず、けれども一日中ガウンのままで、怠惰な生活を送っている主人公の言い換えである。このガウンの特徴はことばの上でも強調されている。

—なんという部屋着 *шлафрок* を着ているんです。そんなものはもう着なくなりましたよ。—と彼はオブローモフを難じた。

—これは *шлафрок* じゃなくてガウン *халат* だよ。—オブローモフは言い、愛しそうにガウンの広い裾にくるまった(17)

ここではドイツ語起源の部屋着 *шлафрок* とチュルク語起源のガウン *халат* とが主人公自身の言葉で区別される。このことは後に登場する友人でドイツ系の勤勉な実業家シュトリツと一切の活動を放棄したオブローモフとも照応し、ガウンとその持ち主のアジア的なだらしなさが一層強調されている。だが重要なのはガウンに主人公の特性が重ね合わされていることだけではなく、それが主人公の運命の浮き沈みと歩調を合わせて繰り返し描かれていることである。シュトリツの示唆で生活を改めることを考え始めたとき、オブローモフは「ガウンを肩からだけではなく、魂からも知能からもいきなり脱ぎ捨てること」(146) だと考え、オリガと恋に落ち充実感に充ちているときにはガウンは打ち捨てられ、主人公から忘れられている。しかしその恋が破れ、失意と熱病に打ち倒れた彼の肩には再びガウンが掛けられ、友人のタランチェフから詐欺同然の仕打ちを受け困窮に陥ったときにはガウンは継ぎだらけで今にも縫い目からほどけそうだと描かれ、最後にその窮状から脱し、アガーフィヤと結婚した後には彼女が手ずから縫った新しいガウンに包まれる。このようにガウンは『オブローモフ』において主人公の状態や周囲との関係のアレゴリーのように用いられている。この語は作品中30回出現するが、29例はオブローモフのガウンのことであり、残り1例も彼との対比で「他のものならガウンなんか着やしない」という表現である。ただこのガウンについてはすでに研究者の間でもその役割についてしばしば言及されるとこ

ろであり、場合によってはシンボルとまで呼ばれている。<sup>7</sup>

その意味ではオブローモフのガウンは提喩としては露骨な例であろう。しかしこのような典型的な例以外にも、主人公とその状態や関係性を描く細部は他にも見られる。ここではコーヒーやウオトカといった嗜好飲料に限定して、それがどういうイメージを担って用いられてるかを数字を挙げながら検討してみることにする。この際先に挙げた『罪と罰』『父と子』と対比することにしよう。なぜなら嗜好飲料も含め、食物のイメージは、次の指摘にあるように、ある程度同時代に共通の社会的コードに基づいて用いられていると考えられるからだ。

バルザック、ユーゴー、フローベールといった同時代のフランス人の多くと同様、リアリズム時代の19世紀ロシアの作家たちは自国における社会的、経済的、政治的関係を例示するための語りのデバイスとして、きわめて効果的に食物イメージを開発した。<sup>8</sup>

### 3. 『オブローモフ』におけるコーヒー

『オブローモフ』におけるコーヒーкофеの出現数は43回(кофий, кофеの異形態を含む)で、頻度として特異に多いといえる。比較のために『罪と罰』『父と子』および現代語の統計であるがザソーリナの頻度辞典(文学的散文の部)の数字を掲げることとする。<sup>9</sup>ただしこうした事物を示す名詞は、『オブローモフ』において女性を表象するために用いられた身体的な語とは事情が異なる。なぜなら身体的な語彙は、作品のモチーフや主題よりは作家の視線や身体感覚に関わって出現する頻度が左右されるが、事物を示す名詞は作品のモチーフや場面と関連して極端に左右される。端的に言えば、喫茶の場面の有無によるのである。そこで『オブローモフ』におけるコーヒーの出現が特異的であることを確認するために、同じ嗜好飲料である紅茶чай(及び指小形などそのヴァリエント)の出現数も同時に掲げておく(表1)。

[表1] кофеと чай の出現数<sup>10</sup>

	総語数	кофе	чай
『オブローモフ』	156,062	43(27.4)	57(36.5)
『罪と罰』	169,890	8(4.7)	57(33.5)
『父と子』	57,707	0(0)	36(62.1)
ザソーリナ	約250,000	1(0.4)	47(18.8)

\* ( ) は十万語当たりの相対頻度。

чай で比較してみれば、少なくとも 19 世紀の 3 作品においては茶を飲むことに関しての言及が決して少なくないことが分かる。だとすれば кофе に関する数値のばらつきはこの語が『オブローモフ』において特殊な意味を担って用いられていることを示している。しかも人物関係への帰属性も偏りを示している。『オブローモフ』においてその分布は圧倒的に第 3 部、第 4 部に多いが、これはアガーフィヤが登場しオブローモフと次第に関係を深めていく部分である (表 2)。

[表2] 『オブローモフ』における кофеと чай の分布

часть	I	II	III	IV	計
кофе	1	4	13	24	42
чай	20	14	9	14	57
総計	21	18	22	38	99

登場人物への帰属は個人に特定できない場合も含まれる。それでも第 3・4 部の 37 例中、ザハールがこぼした 1 例も含めて 36 例はヴィボルグ区のアガーフィヤの家の中のことであり、オブローモフ／アガーフィヤのどちらかに関係する。残りの 1 例についてはオブローモフの女中アニーシヤがアガーフィヤと仲良くなって茶飲み (コーヒー飲み) 友達になる場面であるから、これもまたアガーフィヤと関連する。これに対し同じ嗜好飲料である紅茶は大きなばらつきを示さない。第 1 部においてやや優勢なのはオブローモフが



夢で見るオブローモフカ村の生活の叙述に 10 例用いられているからで、その部分は夢と回想の混合であり小説における出来事の中では別の部分として考えた方がよいかもしれないが、いずれにしても紅茶は特定の人物関係に見られるわけではない。また語としての使用例から見れば飲料そのものとしてだけではなく「お茶の席」の意味で用いられている例（「お茶に招く」「お茶の席に着く」「お茶の時分までに」など）もいくつか見られる。登場人物ではオブローモフと結びつく例がもっとも多いが、個人に特定されない「家中で（飲む）」といった例も含まれ、コーヒーとは逆に関係への喚起力が拡散する傾向が見られる。ではコーヒーはいったいどのようなイメージを担うのだろうか。

コーヒーがロシアに入ってきたのは 18 世紀のピョートル時代だといわれている。だがそれ以降もコーヒーは、日常的にほとんどの階層で飲まれた紅茶とは異なっていたと思われる。例えば地方の地主貴族の世界を舞台とする『父と子』には一度もコーヒーが言及されないのは、それが都会と結びついた嗜好飲料だったからだろう。もちろん文学作品は文化史的な資料ではないのだから、現実には田舎においてはコーヒーがまったく飲まれなかったと考える必要はない。オブローモフの故郷オブローモフカ村の叙述でも紅茶とコーヒーは、2 例だけだが並記されているのだから、田舎において飲まれなかったとはいえない。だが『父と子』において 1 度もコーヒーに関する記述がないのはやはり留意すべきであろう。ツルゲーネフは無自覚に飲料を用いているわけではない。例えばバザーロフと対立するパーヴェル・キルサーノフは若い頃の悲劇的な恋愛の果てに弟の領地に鬱屈している狷介な貴族主義者であるが、彼が愛飲するのはココアや緑茶である。この飲料の特殊さは彼の屈折と孤高ぶりを反映している。だからツルゲーネフが嗜好飲料という記号を意図的に用いていると考えることは可能であろう。したがって『父と子』におけるコーヒーの不在は、コーヒーが田舎とは結びつきにくいイメージであることを示している。

またコーヒーは都市においてもすべての階層で常用されたわけではなく、ある程度贅沢な飲み物だったと思われる。『罪と罰』において、ルージンがソー

ニャを相手に、ソーニャの母カテリーナが夫マルメラードフの追善供養のために浪費をしていると注意する場面で「今日はジャマイカ産のラム酒だの、おそらくマデラワインだの、それに、それにそれにコーヒーまで買い込んできているんですからね」<sup>11</sup>と述べている。ここではジャマイカ産ラム酒やマデラワインといった高級なブランド品とコーヒーが並べられ、極貧のマルメラードフ一家にとって分不相応なものを見なされているのである。『オブローモフ』においてもオブローモフがアガーフィヤの兄ムホヤ・ロフと友人タランチェフの奸計で収奪され困窮に陥ったとき、コーヒーについて、あるいはコーヒーを用いてその零落のさまが描かれる。

彼女（＝アガーフィヤ）が碾いたり、ふるったり、すりつぶしたりすることも少なくなった、というのもコーヒーやシナモンやアーモンドをあまり使わなくなったからだ」（330）

そのとき彼の世話をしているアガーフィヤの悩みはこんな風に表現される。

「彼女は自分のこと、自分のコーヒーのことで溜息をついているのではなく、忙しく立ち働き、手広く家政を取り仕切り、シナモンを碾いたりソースにバニラを入れたり濃いクリームを煮る機会がないから嘆いているのでもなく、一年以上イリヤ・イリイチ（＝オブローモフ）がこうしたものを食べていないから、そして彼に最上の店からコーヒーを何ブードも取り寄せるのではなく、小店で数十コペイカ分ずつ買うようになったからなのである」（331）

そして彼がシュトリツの助けでこの窮境から抜けだしたときにもコーヒーの質が言及される。「コーヒーは、数年前に彼がこの住まい引っ越してきたはじめのころと同じように、丹念に淹れられ、清潔でおいしく供された」（365）。

コーヒーは紅茶と較べて手間のかかる飲み物であった。紅茶はいわば現代の湯沸かし保温ポットのような働きをするサモワールを用いて淹れられたが、コーヒーはそうではない。やや後の時期に出版された家事指南書によれば、まず焙煎の手續きから始まる。『オブローモフ』に見る限りこうした叙述はないので、焙煎された豆も売られていたのだろうが、挽くのは家庭で行われていた。また当時のロシアではコーヒーにチコリの根を煎ったものを混ぜることが普通であり、料理指南書にも「コーヒー1フント (=409.5g) につき1/4フントのチコリを入れる」と明記されている。この配分もまた主婦の腕の見せ所であることは『オブローモフ』にも言及されており、チコリを入れすぎるとザハールに代わってアガーフィヤがオブローモフのコーヒーを淹れるようになると、味が良くなる(239)。淹れ方もまた手のかかるものである。

カップ1杯に対してコーヒーとチコリの混ざったものをティースプーン一杯取る。フランネルの布に入れてコーヒー沸かしに入れ、カップで量った熱湯を注ぎ、レンジにかける。沸騰したら下ろし、すぐに冷水をスプーン1杯注ぎ入れる。<sup>12</sup>

その後、澱が沈むのを待つて供されるわけだから、つききりで淹れなければならぬ、主婦としての技量が要求される飲料だった。こうした背景を担ったコーヒーはオブローモフとアガーフィヤの関係において、繰り返し出現する。アガーフィヤのコーヒーを碾く作業はオブローモフが彼女と話をするきっかけになり、親しみを増したとき、オブローモフがその作業を手伝うこともある。アガーフィヤのオブローモフへの感情は、コーヒーをめぐる配慮というかたちで表現される。例えばオブローモフがオリガへの失恋の痛手からふさぎ込んでいるときには、アガーフィヤは「コーヒーを挽いていても、何をしているのか念頭がなく、チコリをどっさり入れすぎて、とても飲めなくなっても、まるで舌がなくなったみたいに感じない」(296)し、彼が元気になると「コーヒーがよく沸いたかどうか、澄んでいるかどうかを確かめて、滓の入ったのを差し出したりしないよう気を配る」(297)。その他、オブロー

## 『オブローモフ』における事物イメージについて

モフが起こした卒中の発作の予後では、食後の居眠りをしないようにするためにコーヒーが用いられ、最後にオブローモフの死をアガーフィヤが発見するのもコーヒーを持って行った時である。

このようにコーヒーはオブローモフとアガーフィヤの関係を点綴するように描かれ、具体的な描写と比喩の両様の性質を合わせ持つ。ここではアガーフィヤの主婦としての能力と、彼女のオブローモフへの献身が表現されており、同時に都市の中流の生活というイメージが付与されている。

### 4. 『オブローモフ』におけるウオトカ

オブローモフとアガーフィヤの関係に登場するウオトカ、正確にはアガーフィヤ手作りの「スグリの葉を漬け込んだウオトカ」も何らかのイメージを担っていると考えてよいだろう。ここではウオトカ водка と対比するためワイン вино を用いて比較を行ってみる（表3）。

〔表3〕 водка と вино の出現数

	водка	вино
『オブローモフ』	19(12.1)	24(15.3)
『罪と罰』	15( 8.8)	29(17.1)
『父と子』	3( 5.2)	9(15.5)
ザソーリナ	42(16.8)	18( 7.2)

19世紀の3作品の間では вино の相対頻度がほぼ一致している。わずか3つの資料では何も断定できないが、この語が記号として比較的ニュートラルな役割を果たしていたということを示しているのかもしれない。また19世紀の3作品と20世紀を対象としたザソーリナのデータとでは、ウオトカとワインの相対頻度が逆転していることも興味をそそるが、これらの問題については考察する資料の範囲を広げて今後の課題としなければならない。また飲酒という、文化の中で精緻なシステムを作っている領域では、単なる二項対立

では問題は片づかない。上記の作品にすべて登場するわけではないが、酒の種類に関してはウォトカとワインの他にシャンパン шампанское やブランデー-коньяк ビール пиво ラム酒 ром シェリー酒 херес など他にもあるし、ワインひとつとってもマデラワイン мадера メドック медок ソーテルヌ со-терн といった産地別の名称も用いられたことがダリーの辞書から窺える。さらには商標や瓶の呼び名（例えば角形の瓶を示す штоф, полуштоф）といった換喩も用いられることがある。本稿では飲酒全体について論じる余裕はないので、ウォトカのイメージについて、個別の事例から考察してみる。まず『オブローモフ』におけるウォトカの出現の様子である（表4）。

〔表4〕『オブローモフ』における водка と вино の分布

часть	I	II	III	IV	計
водка	3	0	6	10	19
вино	8	2	2	12	24
総計	11	2	8	22	43

上の表で見ると、ウォトカ、ワインに関しては第3部以降とりわけ第4部に多いが、それはこの部分でオブローモフの食生活が描かれる場面の多さにもよる。ただし実際の用例では必ずしもすべて飲酒に結びつくとは限らない。「酒は飲まない」とか「ウォトカは禁止された」といった否定的な文脈での、飲まれない酒の事例や単に調味料として言及されている例もあるので、ここではオブローモフとアガーフィヤの関係の深化とウォトカへの言及に相関性があることを指摘するにとどめる。第3・4部で「スグリの」と限定を受けているのは16例中9例（オブローモフと結びつくのは8例）であり、オブローモフとアガーフィヤを結びつけているこの特定のウォトカを指す例は少なくない。

ウォトカという語自体は17世紀から用いられはじめたとされ、<sup>13</sup> 意外に新しい語である。古来、酒を指すには狭義ではワインを意味する вино が用いられたが、同時にこの語は酒一般を指す場合にも用いられた。また特にウォト

カを指す場合にも водка という語の出現以前、場合によってはそれ以降でも зелено вино, хлебное вино, простое вино など вино に形容詞を添えていう言い方が使われた。したがって водка という語を用いる場合には「他の酒ではなくウォトカ」という限定が生じてくる。ウォトカはロシアの国民的アルコール飲料といわれるが、ワインとは文化的に暗黙の境界があったように思われる。もちろんウォトカは強い酒であり酩酊, 飲酒癖と結びつくだろう。それを窺わせるような事例をいくつか挙げてみる。

まず『オブローモフ』においては、オブローモフが常用するのはワインであり、ウォトカは本来たしなまなかった。それゆえアガーフィヤから最初にこのスグリのウォトカを勧められたとき、彼は「Я не пью」(239) といったんは断る。ここで用いられている不完了体動詞 пить は習慣的行為の否定を示すと考えられるので、彼はワインは飲んでも、ウォトカのような強い酒を飲む大酒家ではないのだろう。

またウォトカという語自体も避けられる事例がある。オブローモフが目の腫れ物を口実にし怠け癖を出そうとすると、オリガはがウォトカで洗えばいいと軽く揶揄する。そのとき彼女が口にするのは водка ではなく простое вино という表現である。これは водка という語そのものがオリガのような貴族の子女の発するのにふさわしくないニュアンスを伴っているからだと推測できる。

『罪と罰』においてウォトカはどのような場面で言及されるのだろうか。飲んだくれのマルメラードフがラスコーリニコフと出会う場面で飲んでいるのは полуштоф (=0.6リットル入りの角瓶) としか記述がないので実はウォトカなのかワインなのか不明である。ただ彼の追善供養の場面で「退職した糧秣官」氏が「これがお好きでした、よく飲んでいました」<sup>14</sup> といいながらウォトカを干すのだから、マルメラードフがウォトカを常用していたと遡って推測できる。ラスコーリニコフ自身はほとんど酒を飲まないが、犯行の前、友人のラズミーヒンの家を訪ねようとして、居酒屋に寄り久しぶりに一杯引っかけるのがウォトカである。その直後に道端の茂みに倒れて馬が殺される悪夢を見る。ラズミーヒン自身は酒好きでウォトカも飲む。例えば彼の引越し

祝いは「茶とウォトカとニシン」で祝われる。

酒席の情景ということではマルメラードフの追善供養の場面がある。そこで供される酒はウォトカ、ラム酒、リスボンワイン（いずれも質が悪いと但し書きが付く）である。ただしこの少し前にルージンがカテリーナを批判して、追善供養に分不相応なマデラワイン、ジャマイカ産ラムを用意しているかのように話すので、実際に出てきたこれらの酒は期待はずれというコンテキストで語られ、格落ちの酒の観がある。その追善供養の席では次第に宴が乱れていき、中でも不作法な「退職した糧秣官」氏が盛んに杯を重ねるのがウォトカである。あるいはスヴィドリガイロフが自殺の直前立ち寄るホテルにはウォトカしかメニューになく、彼はそれを断る。またそのとき隣の乱れたテーブルにウォトカが載っていることが描写されている。このように見ると、『罪と罰』においてはウォトカは貧乏な学生や乱れた不作法な酒宴、場末といった下降イメージと結びついているようだ。だからなのだろうが、富裕なスヴィドリガイロフはシャンパンしか飲んでいない。

オブローモフがウォトカをたしなまないことに一線を引いていたのと同じような事例も見られる。マルメラードフの追善供養に続く場面でルージンがソーニャに盗みの罪を被せ、その仕掛けを目撃していたレベジャートニコフがルージンと口論する。ルージンは、レベジャートニコフが酔っていて見間違えたのだろう、とごまかしを図るが、レベジャートニコフが反論し、自分の正当さの根拠にするのが「ぼくはウォトカだってまったく一度も飲んだことがない、なぜならそれはぼくの信念にはずれるからです」<sup>15</sup> という科白である。

『父と子』ではウォトカはほとんど出てこない（3例）。それ自体が地方の地主貴族階級とウォトカの縁遠さの例証かもしれない。1例は「酒手」という慣用的表現なので除外して、残りの2例を見ると、ひとつ目の例はバザーロフとアルカージがオジンツォーヴァの領地を訪問したとき、取り澄ました執事にバザーロフが「ウォトカ водичка でも一杯振る舞っていただこう」と要求する場面だが、そこにはある種の緊張が感じられる。バザーロフはオジンツォーヴァに強く惹かれているが、同時にそれを認めまいとしており、

彼女の冷静さ、貴族的な面に強い反発を感じてもいる。だからこそ、ここでは執事相手に敢えて粗野な振る舞いをする、そのためのウオトカなのだと考えることができる。もうひとつの例はバザーロフの死を看取りに泊まり込む田舎医者が自分用に所望するウオトカである。この医者は消毒薬も常備していないいい加減な医者であり、彼の元で解剖を行って手に傷を負い、消毒できなかったことがバザーロフの死の遠因であるのだから、ここでもウオトカは粗野や蒙昧とイメージと結びついている。

他の酒についても言及しておく、シャンパンやマデラワイン、ジャマイカ産ラム酒といった高級に属する酒も登場している。シャンパンは現代と同様祝いの席で飲まれ、豊かさ結びついているだろう。例えば『オブローモフ』ではオブローモフの名の日の祝いやシュトリツとオリガの結婚の報を聞いたときに飲まれているし、『父と子』ではバザーロフの帰宅を祝って、彼の老父が秘蔵のハーフボトルを取り出してくる。しかし同時にシャンパンは頹廢とも結びつく場合がある。『父と子』ではバザーロフとアルカージイが訪れる貴族婦人クークシナと結びついている。彼女は進歩派かぶれの浮薄さのカリカチュアであり田舎町で一種のサロンを催し、生半可な知識と進歩派を気取って浅薄な意見を開陳するが、そこでは4人で4本のシャンパンが空けられる。また『罪と罰』でスヴィドリガイロフがシャンパンを好んで飲むのも富と頹廢の結合といえるかもしれない。マデラワインとジャマイカ産ラム酒は『オブローモフ』において、アガーフィヤの兄ムホヤーロフと友人タランチェフがオブローモフに対して陰謀をたくらむ場面で飲まれる。そもそもムホヤーロフはこの小説における仇役を果たす人物である。彼は小役人だがちびちびと賄賂を貯め込んで、いつか上流の女性と結婚したいという卑小な上昇志向を持っているが、その陰険さが酒を用いて以下のように描かれているので、これら的高级酒は『オブローモフ』において屈折したイメージのものとなる。

ワインは取引所から買ってきて、自分でしまい込み、自分で取り出すのだが、テーブルの上にはスグリのウオトカが首ながのガラス瓶に入っ



で載っているきりで、それ以外はいまだかつてだれも見たものがない。買って来た酒は二階の自室で空けるのであった。

タランチェフといっしょに投網に出かけるときは高級なマデラワインを一本必ず隠し持っていき、居酒屋で二人がお茶を飲むときにはラム酒を持ち込むのである (294)。

このように見てくれば、19世紀の3つの作品においてはウォトカは総体的に下層社会や粗野さと結びついたマイナスイメージを帯びているように思われる。だが『オブローモフ』においては、高級酒のイメージを引き下げること、逆にウォトカ、とりわけアガーフィヤのウォトカを称揚するようなベクトルが働いているようにも見える。そこではワインですらマイナスのイメージを付与されることがある。オブローモフが困窮の中で迎える名の日の祝いに、突然シュトリツがやってくる。そのとき供されるのはワインなのだが、安物の酸っぱい赤ワインであり、シュトリツは一口で飲むのをやめる。それを尻目にオブローモフはアガーフィヤのスグリのウォトカの杯を重ね、ついには「オリガは *Casta diva* は歌えても、こんなウォトカは作れないよ」と聡明な貴族の女性オリガと善良だが知的なところのないアガーフィヤを同等に並べる根拠にまで高めてしまう。ここではスグリのウォトカは優雅さには欠けるが、他にはない独自の価値を持った飲料として、プラスのイメージを新たに獲得しているということである。

コーヒーやウォトカに繰り返し言及しながら、ゴンチャロフはこれにまつわるオブローモフとアガーフィヤの関係を描き出していく。このアガーフィヤとの生活はオブローモフが最後に辿り着いた世界であり、彼の人生の総括である。したがってそれを描くための要素であるコーヒーやウォトカという細部も、オブローモフの人生の終着点についての指標となっていると考えられる。例えば『オブローモフ』の食物イメージについては次のような指摘がある。

しかしながらゴンチャロフの眠そうな主人公の肖像を主として心理

的あるいは元型的に理解しようとする読者や批評家にとって、『オブローモフ』における食物イメージはより象徴的に機能していると思なすことが可能であり、小説におけるロマンスのプロットの及んでいる範囲を示唆しているだけではなく、主人公の真のアイデンティティをより明確に、そして彼の探求の性質をより普遍的に定義づけている。<sup>16</sup>

『オブローモフ』においてコーヒーやウオトカが示唆しているのは、もちろんアガーフィヤの主婦としての気配りや能力であり、彼女のオブローモフへ向ける愛情の現れなのであるが、それだけではないだろう。より広い社会的コンテクストで眺めた場合、コーヒーもウオトカもかつてオブローモフが属し、そこへ戻ることを夢見ていた地方の地主貴族文化とは関わりが薄いということが言える。『父と子』において、また『オブローモフ』の中で田舎の生活が描かれている「オブローモフの夢」の章においても、コーヒーやウオトカより紅茶やワインの方がはるかに優勢である。コーヒーはより都市の消費文化的であり、ウオトカはより民衆的、下層的なイメージを担っているのである。したがって小説の結末近く、オブローモフは妻となったアガーフィヤや子供達に囲まれて幼年時代を過ごした村に帰還したかのような至福の感覚にとらわれるが、しかしそれは実際には幻に過ぎなかったということになる。彼は故郷に戻り父祖の暮らしを受け継いだのではなく、ペテルブルグという近代社会から離れることはできなかった。実際ドストエフスキイはオブローモフを評して、それはロシア的であるよりペテルブルグ的であると言っているが、<sup>17</sup> ペテルブルグに通じたドストエフスキイのこの評価は的を射ているのかもしれない。

\*本稿は平成10-11年度科学研究費補助金による共同研究「18-20世紀ロシア小説の文体の計量的・総合的比較研究」(研究代表者: 灰谷慶三。課題番号: 10410106)の成果の一部である。

注

- <sup>1</sup> Достоевский Ф. М. Полн. собр. соч.: В 30 т. Л., 1972-1990. Т. 7. С. 365.
- <sup>2</sup> Тургенев И. С. Полн. собр. соч.: В 28 т. М.; Л., 1960-1968. Т. 8. С. 237.
- <sup>3</sup> 西中村浩「リアリズムとは何か」『スラブの文化』（講座スラブの世界）1），弘文堂，平8，213-214頁。
- <sup>4</sup> A Concordance to Dostoevsky's Crime and Punishment/Ed. by A. Ando, Y. Urai and T. Mochizuki. 3 vols. Sapporo: Slavic Reserch Center, Hokkaido University, 1994.
- <sup>5</sup> 大西郁夫「『オペローモフ』におけるヒロインたちの表象—インターネット上の電子テキストを利用して」、『スラヴ学論叢』4, 2000（刊行予定）。
- <sup>6</sup> Гончаров И. А. Обломов. Л., 1987. С. 8. 以下『オペローモフ』の引用はこれにより（ ）内に頁数を示す。訳は大西による。
- <sup>7</sup> Пруцков Н. И. Мастерство Гончарова-романиста. М., 1962. С. 95, 217; Жук А. А. Русская проза второй половины 19 века. М., 1981. С. 47-48.
- <sup>8</sup> LeBlanc R. D. Oblomov's Consuming Passion: Food, Eating, and Search for Communion... //Goncharov's Oblomov. A Critical Companion. Northwestern Univ. Press. 1998. P.112.
- <sup>9</sup> Засорина, Л. Н. (ред.) Частотный словарь русского языка. М., 1977.
- <sup>10</sup> ザソーリナの統計では чай に同音異義語の間投詞 чай も含まれており，紅茶の意味だけでの数値はやや下がるはずである。
- <sup>11</sup> Достоевский Ф. М. Полн. собр. соч. Т. 6. С. 281.
- <sup>12</sup> Елена Молоховецъ. Подарокъ молодымъ хозяйкамъ или средство к уменьшению расходовъ въ домашнемъ хозяйстве. Часть 2. СПб., 1901. С. 92.
- <sup>13</sup> Черных П. Я. Историко-этимологический словарь современного русского языка: В 2 т. М., 1993. Т. 1. С. 159-160.
- <sup>14</sup> Достоевский Ф. М. Полн. собр. соч. Т. 6. С. 296.
- <sup>15</sup> Там же. Т. 6. С. 306.
- <sup>16</sup> LeBlanc R. D. P. 111.
- <sup>17</sup> Битюгова И. А. Роман И. А. Гончарова «Обломов» в художественном восприятии Достоевского//Достоевский. Материалы и исследования. Л., 1976. Т. 2. С. 193-194.  
「これはベテルブルグの産物だ。彼は怠け者で旦那だ，しかしそれはもはやロシアの旦那ではなく，ベテルブルグ的旦那だ」